Into my Packet

後藤滋樹の 新・社会楽

後藤滋樹
goto@goto.info.waseda.ac.jp
●早稲田大学 理工学部 情報学科

第54回「無理が通れば」

【強い意見に引きずられる】

私も人生の経験を積むにつれて、喧嘩の仲裁に担ぎ出される機会が増えてきた。仲裁というのは、単純に双方の意見を足して二で割るようなものではない。その場の状況を理解して、妥協点を探る必要がある。

とは言うものの、実際には強く主張する側が譲らない場合には、その意見に近いところで仲裁をすることが多い。反対派の人も「そこまで向こうが言うならば」と納得してしまう。

日本人は激しい議論をしないという指摘がある。実際のところ激しい主張をする人はいる。もし相手方が応じれば議論となるのだが、うまく噛み合わない。議論をすると相手を傷つけるとでも思っているのだろうか。

【日本語には未来形がない?】

国語学者の一説によると「日本語には未来形がない」。これには説明がいる。私たちが普通に未来の表現と思っている文章は、未来形のようでもあり、推量形でもあるという。

「明日は雨が降るだろう」この「だろう」は未来のようでもあるが、話者の推量も表現している。つまり雨が降るというのは、ある人の主張であり、主観的な表現なのだ。これに対して、雨が降らないと反論すると、気象上の議論と同時に話者の主観に異論を唱えることになる。

このような反論が相手を傷つけると心配すれば、議論を遠慮したほうがいい。何が相手を傷つけるかという判定基準は、立場を逆にすればわかる。つまり自分が傷つくと感じるようなことを相手に言ってはいけない。

こういった理由で、日本人は議論が下手なのだという。ある人の意見と、その人格とが不可分になっている。議論をすると相手を全面的に否定してしまう気がする。実際には、ある人の意見と、その本人とは独立の存在のはずなのに。

【誤解が喧嘩の素】

喧嘩の状態に陥った双方の意見を聞いてみると、多くの誤解が発生している。同じ現象でも解釈が違う。A氏いわく「昨日の私の発言のあとでB君が沈黙を続けているのは、私の言い分を認めているからだろう」。B氏の見解『昨日のA君の攻撃には唖然とした。あまりに非常識な見解なので、反論するのも馬鹿らしい。当分の間は無視しておくことにした』。これでは正反対だ。

言葉の誤解も生じる。「適当にやれというから、手近の材料で片づけておいた」。『私は適切に進めるように依頼したのに、あれでは手抜きだ。いったい何を考えているのだろう』。

「事務的に進めるように言われたので、全員に同じ案内状を出した。場所と日時が伝われば十分だろう」。『彼のものの言い方は実にケシカラン。自分をなにさまだと思っているのだ』。

【少し攻撃して反応を見る】

喧嘩の事例を基にして考察を続けよう。

基本的に相手を傷つけるのを避けようとすれば、攻撃を手加減する。少し攻撃してみて相手の反応を探る。もし「恐れ入りました」と言えば、そこで終わりにする。相手がひるまなければ、なお攻撃を続行する。こういう戦法をとる人は、材料を小出しにして、仲裁をする立場からは状況が見えにくい。

小出しの材料に相手が応戦を続けると、議論の主題がズレていくことがある。こうなると、議論というよりは相手を負かすのが目的のゲームのようになってしまう。

【引き際が悪い】

自分が喧嘩の当事者になると、自分からは終結を言い出しにくい。それでは負けたような気分になる。議論がうまい人というのは、引き際が見事である。あっさりと相手の言い分を認める。

小出しに相手を攻撃する人は、相手が降参しなければ、どんどん深追いをする。このような場合に、巧妙な相手は降参せずに引き、相手の攻撃材料が出尽くして根拠薄弱になってくるのを待つ。その弱い点を突く。

喧嘩の仲裁を書いたつもりであるが、喧嘩指南のような内容になってしまった。

【書き言葉と話し言葉】

初めて電子メールの上での喧嘩を見聞きしたときに、喧嘩の内容はさておき、メールの偉大な力に感動した。喧嘩に使えるのは一流のメディアである。

電子メールの上の喧嘩は、書き言葉が主体になるので、従来の口喧嘩とは異なる。手紙で喧嘩した例は、歴史に残るような大論争もある。これに比べると、議論の反応時間がインターネット喧嘩では極端に短い。このような要素が人間にどのように影響を与えるか、さらに研究すべきだろう。ネットワークは感動を伝えることができるが、同時に喧嘩の場所も提供するのである。

Illust : Harada Kaori

インターネットマガジン 株式会社インプレスR&D
©1994-20 Impress R&D

［インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ］ ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D（株式会社インプレスから分割）が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

http://i.impressRD.jp/bn

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容（技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど）は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者（執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など）が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元（株式会社インプレスR&D）、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D（当時は株式会社インプレス）と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先
株式会社インプレスR&D
All-in-One INTERNET magazine 編集部
im-info@impress.co.jp

Copyright © 1994-2007 Impress R&D, an Impress Group company. All rights reserved.